

歴史文化クラブ 2019年11月度研修会

## 古代豪族ワニ氏の実像

—その系譜と奥津城を探る—

1. 実施日： 令和元年11月12日（火）
2. 集合場所： JR 櫛本駅 改札口 10:00 集合
3. 行程スケジュール：

櫛本駅出発 → 柿本人麻呂歌碑 → 柿本寺跡  
→ 和邇下神社 → 横穴式石室 → 赤土山古墳（昼食）  
→ 東大寺山古墳 → 櫛本高塚公園 → 和邇坐赤坂比古神社  
→ 和珥坂下伝承地 → 白河橋バス停にて解散

（15:00の予定）

4. 行程は約5km

5. 資料：

- ① ワニ氏について
- ② 地図
- ③ 参加者名簿

奈良・人と自然の会

## 歴史文化クラブ

担当世話人： 藤田秀憲 塩本勝也

事務局： 中井弘 （090-2381-1122）

# 周辺の概略図



# ワニ氏について

## 1. ワニ氏概略

和珥氏、丸邇・和邇・丸とも書く。名は本拠地の大和国添上郡にあった和邇庄（奈良県天理市和爾町）や和珥坂などの地名に由来する。5世紀から6世紀にかけて勢力を持った豪族である。

「書記」孝昭天皇条によれば、孝昭天皇皇子 天足彦国押人命（あめたらしひこくおしひとのみこと）は和珥臣の始祖と注され、皇別の始祖系統をもつ。姓は臣。

「記紀」の系譜記事を見ると、開化・応神・反正・雄略・仁賢・継体・欽明・敏達の八天皇に后妃を入れたことが記されていて、天皇家の外戚として大きな勢力を有していたと考えられる。

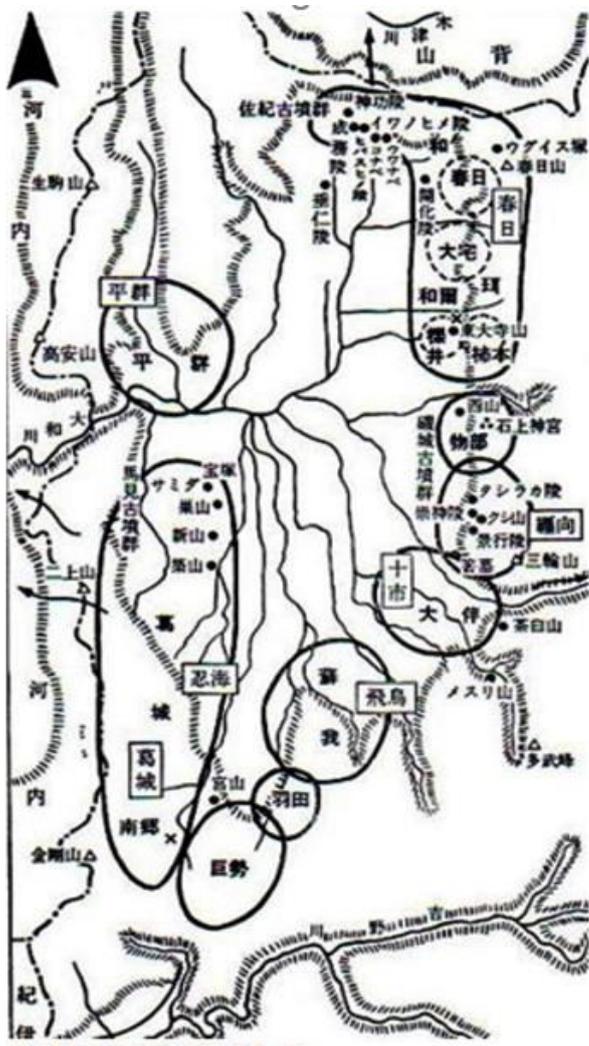
ただし、外戚でありながら、この氏族出身の後妃所生の皇子が皇位につくことはなく、その皇女のほうが再び后妃となることに特徴があってこれが、和珥氏が政治史の表面に現れにくくしている。

（注）「記紀」応神天皇条に、宇遲能和紀郎子（うじのわきいらつこ）は和邇の比布礼能意富美（ひふれのおおみ）の女である宮主矢河枝比売（みやぬしのやかわえひめ）の子であり、父（応神天皇）に皇太子に任命されながらも若死し、兄の大雀命（おおさざきのみこと）仁徳天皇に皇位は継承される。

のちに、先述の本拠地から同郡の春日（奈良市東部の辺り）に移り、春日氏を称する。さらに、春日から大宅・小野・粟田・柿本などの十五氏族が分出して、小野からは遣隋使として有名な小野妹子が、柿本からは万葉歌人の柿本人麻呂が出て活躍している。

（日本古代豪族・氏族事典 大脇由紀子より）

## 2. ワニ氏の本拠地（大和における豪族の分布図 岸 俊男「日本古代研究史」より）



### <奈良盆地北東部>

#### ワニ氏同祖系譜

大和北東部の在地土豪の統一体  
木津川、宇治川、琵琶湖、日本海へ  
丹波、山陰、山陽、近江、尾張、東国へ

### <奈良盆地中東部>

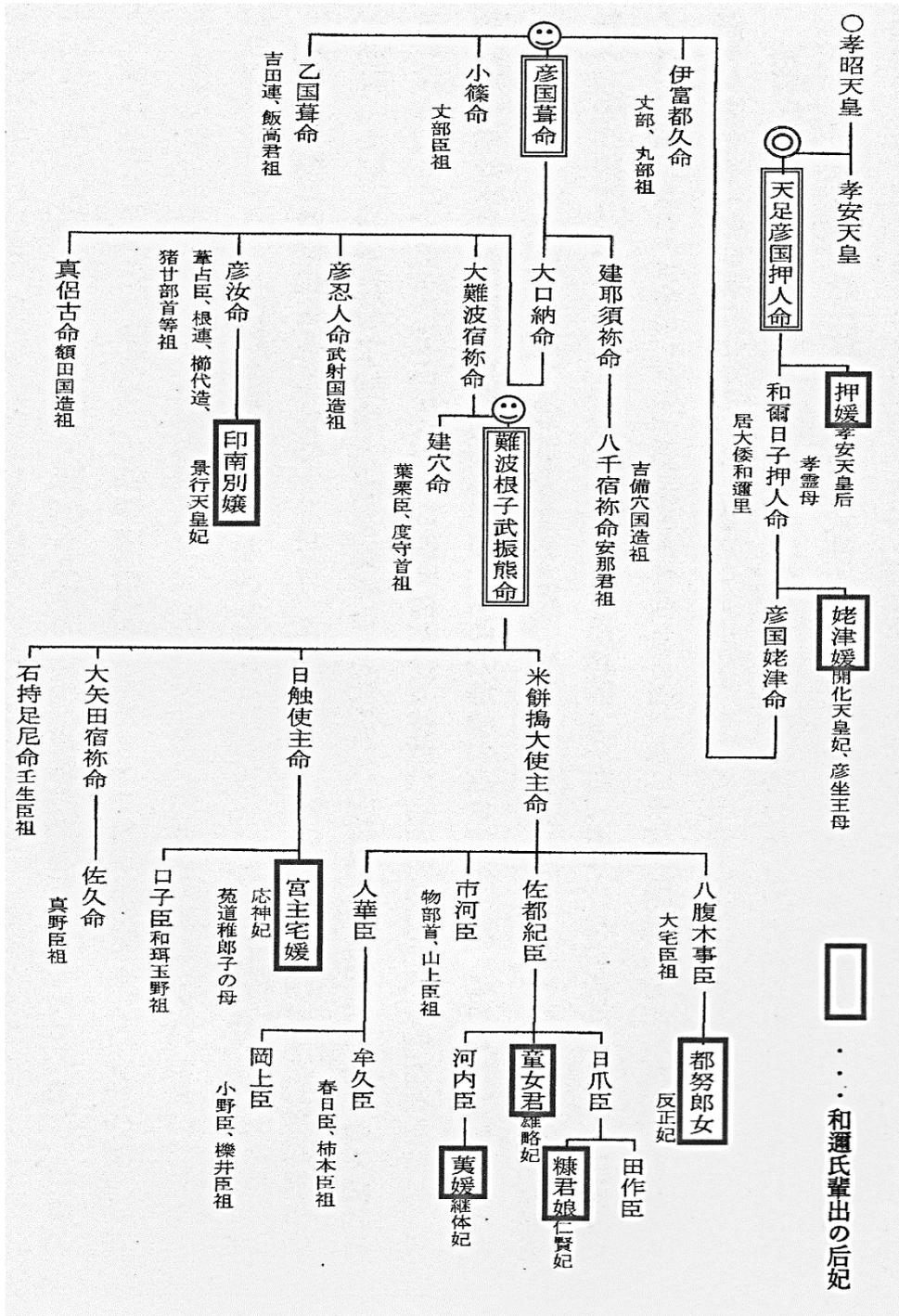
大王家および大伴、物部、中臣等の  
伴造り

### <奈良盆地南西部>

#### 武内宿禰後裔系譜

大和南西部在地土豪の統一体

### 3. ワニ氏の系統図



① 4世紀から6世紀にかけて奈良盆地北東部一帯（旧大和(やまと)国添上(そうのかみ)、添下(そうのしも)両郡)に勢力をもった臣(おみ)姓有力豪族で、部曲(かきべ)は大和、山城(やましろ)、近江(おうみ)諸国から中部・中国地方にかけて分布する丸部(和邇部)がある。

② 大和国家成立期には葛城氏などとともに重要な役割を果たしたと思われるが、崇神朝に建波爾安(たけはにやす)王、仲哀朝に忍熊王を討伐したという伝承以外には明確な説話伝承が少ない。

③ 始祖は孝昭天皇の皇子天足彦国押人命とされ、欽明朝頃には春日山麓に本拠を移し、春日氏を称する一族を筆頭に、大宅(おおやけ)、粟田、小野、柿本などの諸氏に分枝・分住した。

④ 5、6世紀に大王(天皇)家の后妃となった者は、後の蘇我(そが)氏と並び最多を数え、応神、反正、雄略、仁賢、継体、欽明、敏達などの后妃となっている。

⑥ 本拠地は天理市和爾町、櫛本(いちのもと)町付近。式内社和爾坐赤坂比古(わにいますあかさかひこ)神社、和爾下(した)神社を奉斎した一族と考えられており、後漢中平年間(184~189)の紀年銘をもつ鉄刀を出土した東大寺山古墳を含む櫛本古墳群はこの一族の墓所と推定され、奈良市佐紀盾列(さきたたなみ)古墳群も関係があるのではないかといわれる。系図として「和邇氏系図」(駿河浅間神社旧蔵)がある。

[弓野正武]、『岸俊男著『日本古代政治史研究』(1966・塙書房)』

#### 4. ワニ氏の分枝と地方への展開（「ワニ氏の研究」加藤謙吉氏より）

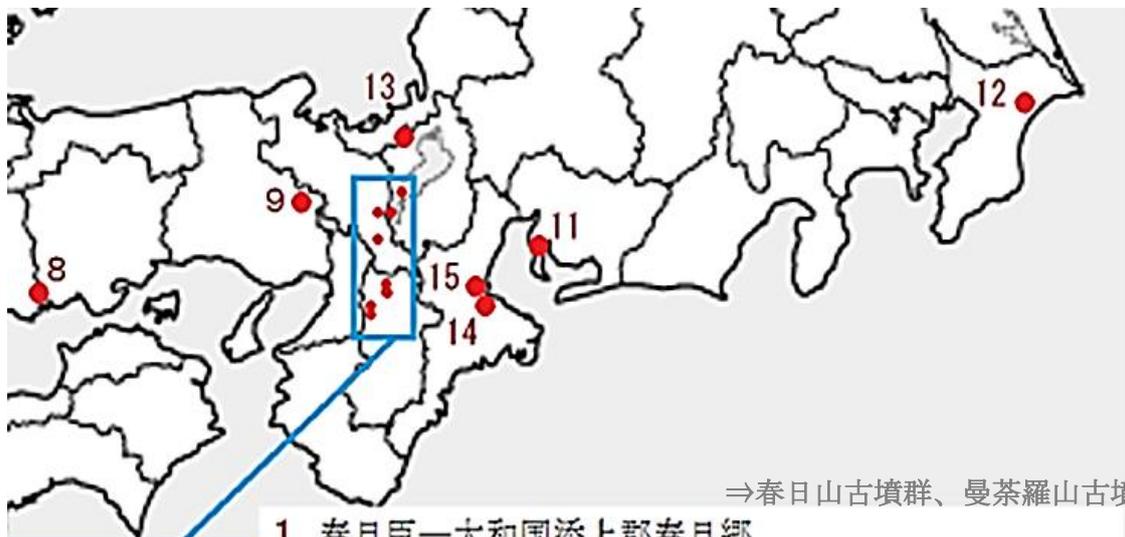
- ① ワニ氏は、5世紀後半～6世紀前半に后妃を輩出し、大和朝廷内部に重要な位置を占めた氏族であるが、あたかもこの時期は葛城氏と蘇我氏の后妃輩出期の過渡期にあたる。
- ② ワニ氏出身の后妃が生んだ皇子で即位した例はないが、ワニ氏出身の皇女が再び后妃になるというように、后妃関係が重視されており、②仁賢以後③敏達までのすべての天皇が、后妃関係においてワニ氏と何らかのつながりを持ち、この氏が朝廷内に隠然たる勢力を有したことが知られる。
- ③ ワニ氏の伝承は「古事記」にもっとも顕著であるが、その特徴として、説話の舞台が大和から山背にかけての一带（ワニ氏とその同族の勢力圏）を中心とすること。反乱の討伐など大和朝廷の国土平定とかかわるものが多いこと。反乱の征討将軍である「日子国夫玖命（ひこふきふく）」と難波根子建振熊命（なにわねこたけふるくま）」には、後続に限定される「命」の尊称が例外的に付されている。
- ④ ワニ氏の本拠地は、大和国添上郡の和爾（現奈良県天理市和爾町）で、添上郡にはワニ氏の部曲であるワニ部（丸部・和邇部・和爾部・和仁部・鰐部）の分布も集中的に認められる。
- ⑤ 「記紀」によれば、ワニ氏は②欽明朝以後、「春日氏」と称されることになるが、これはワニ氏が奈良盆地東北部一帯に広く勢力を確立するに及んで、和爾から春日の地（添上郡春日郷、現奈良市白毫町付近）に移り、「春日氏」と改名したことを示す。
- ⑥ ワニから春日への改名に続いて、③敏達朝の頃、大宅・粟田・小野・柿本などの諸氏が春日氏より分枝する。このうち粟田・小野両氏は山背国愛宕郡や宇治郡、近江国滋賀郡に拠点を有し、大宅氏も宇治郡に濃密に分布しているが、これら諸氏の本貫が大和であったのか、山背や近江なのかは明らかでない。
- ⑦ ワニ部の分布は、山背を中心に、東は近江・美濃・尾張・三河・伊豆・甲斐、北陸道では若狭・越前・加賀、山陰道では播磨・備中・周防、四国では讃岐にみられるが、これらはワニ氏やその同族の勢力圏と重複する場合が多い。
- ⑧ ワニ氏の同族には、血縁者的に分枝した一族と、ワニ部などの地方管掌者で、後にワニ氏同祖系譜に組み込まれた者も存するが、「古事記」⑤孝昭天皇段のワニ氏同祖系譜が成立する時期、は、③天武朝ごろとみられる。
- ⑨ 「古事記」のワニ氏同祖系譜と武内宿祢後裔氏族の同祖系譜はどちらも大系譜であるが、武内宿祢後裔系譜が大和西南部の在地土豪の統一を示すのに対して、ワニ氏同祖系譜は大和東部の在地土豪の統一体を示している。  
両者が大和朝廷の北進、西進の要衝をそれぞれおさえ、その中間の奈良盆地中東部に、皇室と大友・物部・中臣伴造諸氏が占拠していた事実がうかがえる。

⑩ 後漢の中平銘鉄刀を出土した天理市樺本町高塚の東大寺山古墳は、初期ワニ氏の活動と関わる古墳の可能性があり、ワニ氏勢力県内の奈良盆地北部（佐紀・佐保の南麓）に立地する佐紀盾列古墳群もワニ氏との関係を想定して差しつかえないと思われる。

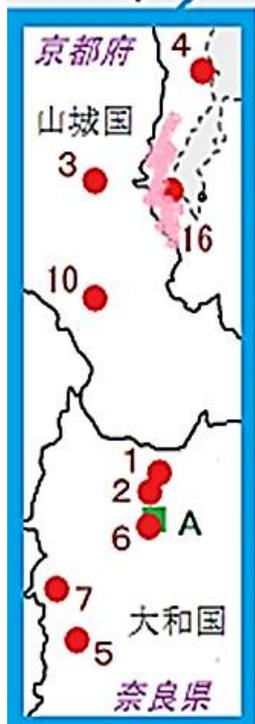
⑪ ワニ氏の伝承が多いのは、ワニ氏と緊密な関係にあったとみられる稗田阿礼や天武天皇の舎人であった和珥部臣君手が、「古事記」の編纂に関与する状況が推測される。

⑫ ワニ氏の地理的位置は、大和から山背に出て、東は近江を經由し東国・北陸地方へ、西は丹波路・淀川により山陰・山陽へと進むコースのいずれも出発点に当たる。ワニ氏の大和において占める地理的位置は、この氏が大和朝廷の国土統一過程に重要な役割を果たした事実を示唆している。また、ワニ氏の同族やワニ部の分布地域は継体天皇の大和入りコースと一致する点が多いので、ワニ氏やその同族が継体擁立になんらかの関係を有した可能性も考えられる。

(参考) ワニ氏の拡がり (分枝・分住)



⇒春日山古墳群、曼荼羅山古墳



- 1 春日臣—大和国添上郡春日郷
- 2 大宅臣—大和国添上郡大宅郷 (奈良市古市町)
- 3 粟田臣—山城国愛宕郡上粟田・下粟田 (旧粟田村) (福山市)
- 4 小野臣—近江国滋賀郡小野村 (大津市)
- 5 柿本臣—大和国葛下郡 (柿本神社)
- 6 壹比韋臣 (樺井臣)—大和国添上郡 (樺本村)
- 7 大坂臣—大和国葛上郡太坂 (大坂山口神社)
- 8 阿那臣 (吉備穴国造)—備後国安那郡 (福山市)
- 9 多紀臣—丹波国多紀郡 (兵庫県篠山市)
- 10 羽栗臣—山城国久世郡羽栗郷 (双栗神社)
- 11 知多臣—尾張国智多郡 (知多郡)
- 12 牟那臣—上総国武射郡 (千葉県山武郡)
- 13 都怒山臣 (角臣)—近江国高島郡角野郷 (高島市)
- 14 伊勢飯高君—伊勢国飯高郡飯高郷 (松坂神社)
- 15 (伊勢)壹師君—伊勢国壹志郡壹志郷 (松坂市/津市)
- 16 近淡海國造—淡海国 (滋賀県西部)
- A 和邇臣—大和国添上郡和邇 (和邇町) ⇒和爾氏本願地

## 5. 記紀の伝承

- ① 和珥臣の始祖は觀松彦香殖稻天皇（みまつひこかえしねのすめらみこと）（孝昭天皇）の長男の天足彦国押人命。天足彦国押人命の母は孝昭天皇の皇后の世襲足媛（よそたらしひめ）（尾張連の遠祖瀛津世襲の妹）。孝昭天皇の崩御の後、同母弟の日本足彦國押人尊が即位した（孝安天皇）。
- ② 崇神天皇⑩の時代、彦国葺（ひこくにぶく）が武埴安彦の反乱軍を討伐して有功。
- ③ 仲哀天皇⑭の崩御後、武振熊（たけふるくま）が將軍として忍熊皇子の反乱軍を討伐。
- ④ 応神天皇⑮の皇太子菟道稚郎子（うじのわきいらつこ）の母宮主宅媛は、日触使主の娘。
- ⑤ 開化天皇⑨（和珥臣の遠祖姥津命の妹姥津媛 彦坐王を生む）  
反正天皇⑱（大宅臣の祖木事が女津野媛）・雄略天皇㉑（春日和珥臣深目の女童女君）・  
仁賢天皇㉔（和珥臣日爪が女糠君娘）・繼体天皇㉖（和珥臣河内の女ハエ媛）・  
欽明天皇㉙（春日日爪臣の女糠子）・敏達天皇⑳（春日臣仲君の女老女子夫人）  
等々の皇妃を輩出。（日本書紀より抜粋）

## 6. 和珥氏族の海人性

和珥氏一族の分布が、大和盆地東北部から山城の宇治地方、さらに近江の琵琶湖周辺地域を経て、若狭・越前日本海域に至るラインで濃密に分布しており、そこから海路で韓地方面につながった可能性もある。

和珥氏一族の海人性（和珥氏～中国江南から来た海神族の流れ～室賀 寿男 より）



和珥氏は、琵琶湖沿岸にも栄え、朝貢するカニを奉納することを仕事としていた。そのルートは、敦賀から琵琶湖北岸に出て、湖の西岸を通り、山科を経て、椿井大塚山古墳のある京都府相楽郡に至り、大和に入るものであったといわれている。（若狭湾→琵琶湖→瀬田川→宇治川→木津川の水運）

椿井大塚山古墳の被葬者は木津川水運を統治する者であり、和爾氏一門かまたは服属する族長と思われる。

石原氏によると、ワニが古代朝鮮で剣あるいは鉄を意味するところから、製鉄にかかわった氏族であり、琵琶湖の和邇の近くにも多くの製鉄や採鉄の遺跡が残っていると述べている。

和爾氏は5世紀～6世紀にかけて奈良盆地北部に勢力を持った古代日本の中央豪族であり、出自については2世紀頃、日本海側から畿内に進出した太陽信仰を持つ鍛冶集団とする説がある。

<備考1> 地方の国造としての展開

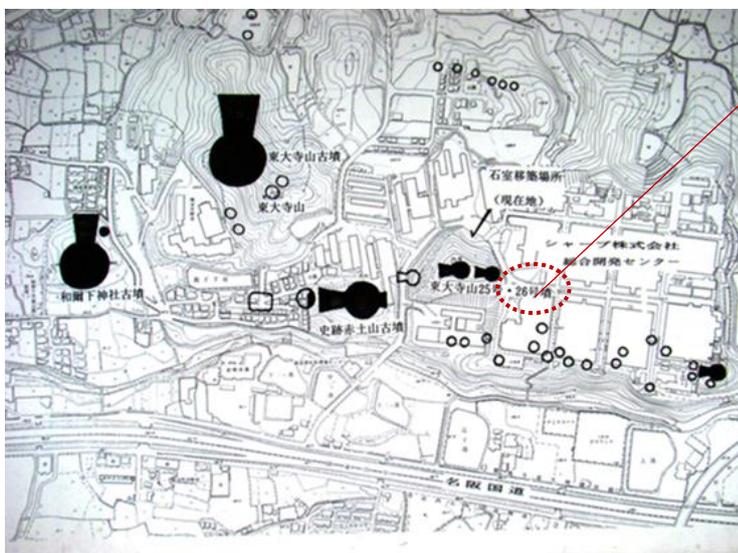
地方の国造としては、武射国造（上総国武射郡）、額田国造（美濃国池田郡郷）、吉備ノ穴国造（備後国の安那郡）があり、伊勢の飯高県造・一志県造も有力者であった。近江の南部から西部にかけての近淡海国造も和珥氏の出で、日触使主命の後であったといわれている。

和邇部一族は、伊勢、美濃から尾張、三河、遠江、駿河にかけての地に根付いて、その末流は各々の地で有力な中世武士となったが、いずれも出身・系譜を変えて藤原姓などと称したため、詳細は不明である。

<備考2> 継体天皇の擁立と息永氏と和珥氏のつながり



7. ワニ氏の本拠地と奥津城



東大寺山古墳群の内、3基の横穴式石室と小石室2基（いずれも6~7世紀初頭）が丘陵前シャープ門前に移設・展示されている。





(天理教城法大教会発行 東大寺山古墳より)

### (1) 東大寺山古墳 (とうだいじやまこふん)

櫛本町に所在する全長約 140 メートルの前方後円墳ですが、現在は竹藪におおわれています。1961 年におこなわれた発掘調査で粘土槨の埋葬施設が発見され、家形の飾りを付けた三葉環頭大刀や刀身に中国後漢時代の年号 (中平年間：西暦 184～188 年) を表した金象嵌をもつ大刀などが出土しています。墳丘には円筒埴輪が並べられていました。4 世紀後半の古墳時代前期後半に築造された前方後円です。

副葬品の中に、24 文字を金象嵌で表し、「中平」の紀年銘を持つ長さ 110cm の鉄刀があった。「中平」の年号は 184 年から 190 年であり倭国乱の時期に含まれる。

後漢では 184 年に起きた黄巾の乱をきっかけに、魏・呉・蜀の三国時代に突入する直前である。「中平」の頃、楽浪郡を支配していたのは公孫氏であるから、この鉄刀は和邇氏が公孫氏に朝貢して下賜された刀であろう。東大寺山古墳は和邇氏の領域にあり、4 世紀後半築造を考えると埋葬者は建振熊の可能性が高い。

## (2) 「中平銘鉄刀」

この刀を発掘調査した天理大学名誉教授の金関恕氏（かなせきひろし・84才）は、鉄刀に刻まれた銘文の字体は、後漢の官営工房の字体とは異なる。後漢の官営工房の字体は様式化が進み整った隷書体である。この刀に刻まれた字体は稚拙ではないが、様式化が進んでいない。したがって銘文が刻まれたのは、後漢の官営工房以外の地ではないかと推理する。

昭和36年（1961年）、天理参考館が発掘調査を行い、埋葬施設の粘土槨から、多数の刀剣類や石製品が発見され、4世紀後半（古墳時代前期後半）に築造されたことがわかりました。また、墳丘に並べられた円筒埴輪の位置から、墳丘の長さは約130mと復元されました。東大寺山古墳の副葬品は、2017年、一括で国宝に指定され、現在は東京国立博物館所蔵されている。

	秦	咸陽	政（始皇帝）	
221	秦		始皇帝	<ul style="list-style-type: none"> <li>・bc219:徐福渡来伝説</li> <li>・統一文字:小篆書</li> </ul>
			胡亥	<ul style="list-style-type: none"> <li>・bc210始皇帝殞</li> </ul>
202	前漢	長安	高祖（劉邦）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・劉邦（bc256-bc195）</li> <li>・bc141武帝（bc156-bc87）即位</li> <li>・bc108武帝朝鮮半島に楽浪郡など漢四郡設置</li> <li>・司馬遷（bc145-bc87）</li> <li>・bc97「史記」完成・隸書・布</li> <li>・bc55傭公式「論衡」成文化・隸書・竹簡</li> <li>・「山海経」完成 伯益・劉? (?-23)? 成立時期秦-漢時代?</li> </ul>
AD 8	新		王莽	王莽（bc45-ad23）
23	後漢	洛陽	光武帝（劉秀）	ad82「漢書」地理志完成 班固（32-?）
57			明帝	倭人記事:「然東夷天性柔順、異於三方之外、故孔子悼道不行、設浮於海、欲居九夷、有以也夫。樂浪海中有倭人、分為百余國、以歲時來獻見云」 「後漢書」東夷伝記事:「建武中元二年（AD 57）倭奴國奉貢朝賀 使人自稱大夫 倭國之極南界也 光武親以印綬」（漢委奴國王金印） 「安帝永初元年（AD 107年）倭國王帥升等獻生口百六十 人願請見」「會稽海外有東?人 分為二十餘國」 ・「北史」倭国伝記事:「後漢書」東夷伝記事と同一記事あり。 ・ad67年:仏教伝来 白馬寺 ・「兩書倭国伝記事: 安帝時（106-125）、又遣使朝貢、謂之倭奴國」
184			少帝	・184年黄巾の乱 ・後漢書記事:「倭国乱れ相伐すること歴年」 ・(参考) 184年頃 東大寺山古墳鉄刀銘文 中平□□ 五月丙午 造作支刀 百練清剛 上応星宿□□□□ ・2c末頃「論衡」完成 王充（27-97）? ・「後漢書」檀石槐伝記事: 「光和元年（AD 197年）冬 又寇酒泉 綽遠莫不被

### 中平銘鉄刀

刀身の棟の部分に24文字を金象嵌で表した長さ110センチメートルの鉄刀1口が出土した。鉄刀の刀身の銘文は「吉祥句」を用い、

「中平□□（年）五月丙午造作文（支）刀百練清剛上応星宿□□□□（下避不祥）」

と記されていた。内容は「中平□年五月丙午の日、銘文を入れた刀を造った。よく鍛えられた刀であるから、天上では神の御意に叶い、下界では禍を避けることができる」という意味である。

中平はAD184~189年  
卑弥呼共立の時代  
朝鮮半島は後漢の遼東太守は公孫度

東大寺山古墳から出土した5本の鉄刀の一本

環頭飾り（4世紀後半）の作り替え  
被葬者がわざわざ作り替えている。

東大寺山古墳は4世紀後半の築造  
被葬者は「建振熊」か?



中平銘鉄刀(東大寺山古墳群の鉄刀、特別展「オノ」)

金象嵌銘文

## (2) 赤土山古墳

櫛本町に所在する全長 106.5 メートルの前方後円墳です。後円部の先端に造り出しを築いているのが特徴です。墳丘には円筒埴輪列が存在したほか、家形埴輪、短甲形埴輪、盾形埴輪などが出土しています。4 世紀後半の古墳時代前期後半に築造された古墳と考えられています。国指定史跡。

## (3) 和爾下神社古墳

東大寺山丘陵の西麓台地上に築造された前方後円墳である。全長約 120m、後円部直径約 70m、高さ 5m、前方部幅 50m である。前方部が短く、端部が両側へ撥形に開く特異な形態である。当古墳と、東大寺山古墳、赤土山古墳、及びシャープ総合開発センター内に所在する古墳などにより東大寺山古墳群を構成している。

当古墳から東北約 800m には和爾の集落があるが、この周辺一帯は、古代大和政権の一翼をになった和爾氏の本拠地と推定され、東大寺山古墳群は和爾氏の奥津城と考えられる。内部主体や副葬品は明らかではないが、墳丘西側には石棺材があり、また昭和 59 年の防災工事に伴う調査において一基の埴輪円筒棺が検出された。これらの遺物により古墳の築造時期は、4 世紀末から 5 世紀初頭と推定されている。

## (4) 和爾下神社（本殿重要文化財）

神護景雲 3 年（769）東大寺領の櫛庄へ水を引くため高瀬川の水路を今の参道に沿った線へ移し、道も新しく真っ直ぐに作らせたので、この森を治道の森といい、宮を治道社といった。和爾下神社古墳の上に祀られた神社で櫛本の地方にいた豪族の氏神であったが、今は櫛本鎮守の神社である。

この治道社の（春道社とも書く）祭神は素戔鳴命の本地が牛頭天皇であるので、天王社と

もいわれ、ここに建てられた柿本寺との関係で柿本上社ともいわれた。明治初年に延喜式内の和爾下神社がこれに当たると考証されて社名を和爾下神社と定めた。

今の社殿は、三間社流れ造り、桧皮葺一間向拝付で桃山時代の様式を備え、古建築として重要文化財に指定されている。 祭神は、素戔鳴命 大己貴命 稲田媛命

例祭は、7月14日 祇園祭、10月14日 氏神祭礼 (天理市教育委員会)

#### (5) 柿本寺(しほんじ)跡と歌塚

柿本寺は柿本氏の氏寺で、出土した古瓦から奈良時代に創建されたと考えられている。室町時代には、現在の櫛本小学校の西側に移転し、江戸時代には学僧を多く輩出し、和歌や茶の湯などに親しんだが、明治初年に廃寺となった。

南北長時代前後に描かれた「柿本寺曼荼羅」(大和文化館蔵)ほかの寺宝が残されている。

現在歌塚の碑は、享保17年(1732)に、森本宗範や僧らによって建立されたものである。



柿本寺曼荼羅 (大和文化館蔵)

#### (6) 和珥坐赤坂比古神社

櫛本の集落を西南に望む標高約90メートルの台地に鎮座する神社で、式内大社和邇下赤坂神社にあてられている。祭神は現在、阿田賀須命と市杵島姫命としているが、『大和志』には「祭神赤坂比古命、何神ナルカヲ知らず、蓋し和邇氏の祖神ならし」といっている。『日本書紀』の孝昭記に、和珥氏の始祖として皇子天足国押人の名が見え、『古事記』には、天皇の兄の天押帯日子命を、春日・大宅・桑田・小野・柿本・壺比葺の各臣などワニ系16氏の始祖としている。この地方を本貫に、北は春日山西麓一帯に移住した古代の有力な氏族であった。創始は、明らかでないが、すでに天平二年(730)の『大倭国正税帳』(正倉院文書)に、「丸神戸、穀五〇斛七斗九合耗九斗九升四合、定四十九斛七斗一升五合替、(以下略)」などがあり、『新抄格勅符抄』所収の大同元年(806)牒にも、「和邇神四戸大和」とあるが、古くから名ある神社であることが分かる。『三代実録』には貞観元年正月二十七日の条に当社の神を従五位下から、従五位上に神階を進められている。『大和志』に「今天王と称す、域内に常楽寺あり。上梁文に曰、天正六年(1578)重修」とある。神宮寺として常楽寺があったが、明治初年廃寺となり、仏像その他は隣接する浄土宗善福寺に移された。当社社務所に「天正十四年(1586) 諸願成就

奉懸牛頭天王 皆令満足岩鶴敬白 九月八日」との墨書銘のある銅板製懸仏のほか、元和六年（1620）銘の懸仏がある。なお境内には、横穴式石室の円墳がある。（奈良県史）

（7）和邇坂下（わにさかもと）伝承地の石碑

古事記の応神天皇に関する記述には和邇氏の娘、宮主矢河枝比売（やかはえひめ）との出会いが記載されています。和邇氏がもてなす宴会で披露した天皇の長歌の中に「・・・櫛井の和邇坂・・・」とあります。櫛井は、現在の櫛本付近の事で和邇坂がこの地域まで含まれる地名であったことが分ります。また崇神天皇に反旗した山代の武埴安彦を征伐する説話があります。古事記には「丸邇臣の祖、日子国夫玖（ひこくにぶく）命を副えて遣はしし時、即ち丸邇坂にイワイベを据えて罷り行きき」とあり、和邇氏の祖人、彦国葺が武埴安彦の征伐に出陣する際に戦勝祈願を和邇坂で行っていたようです。（天理市教育委員会）

以 上

（By 藤田秀憲 2019年11月）

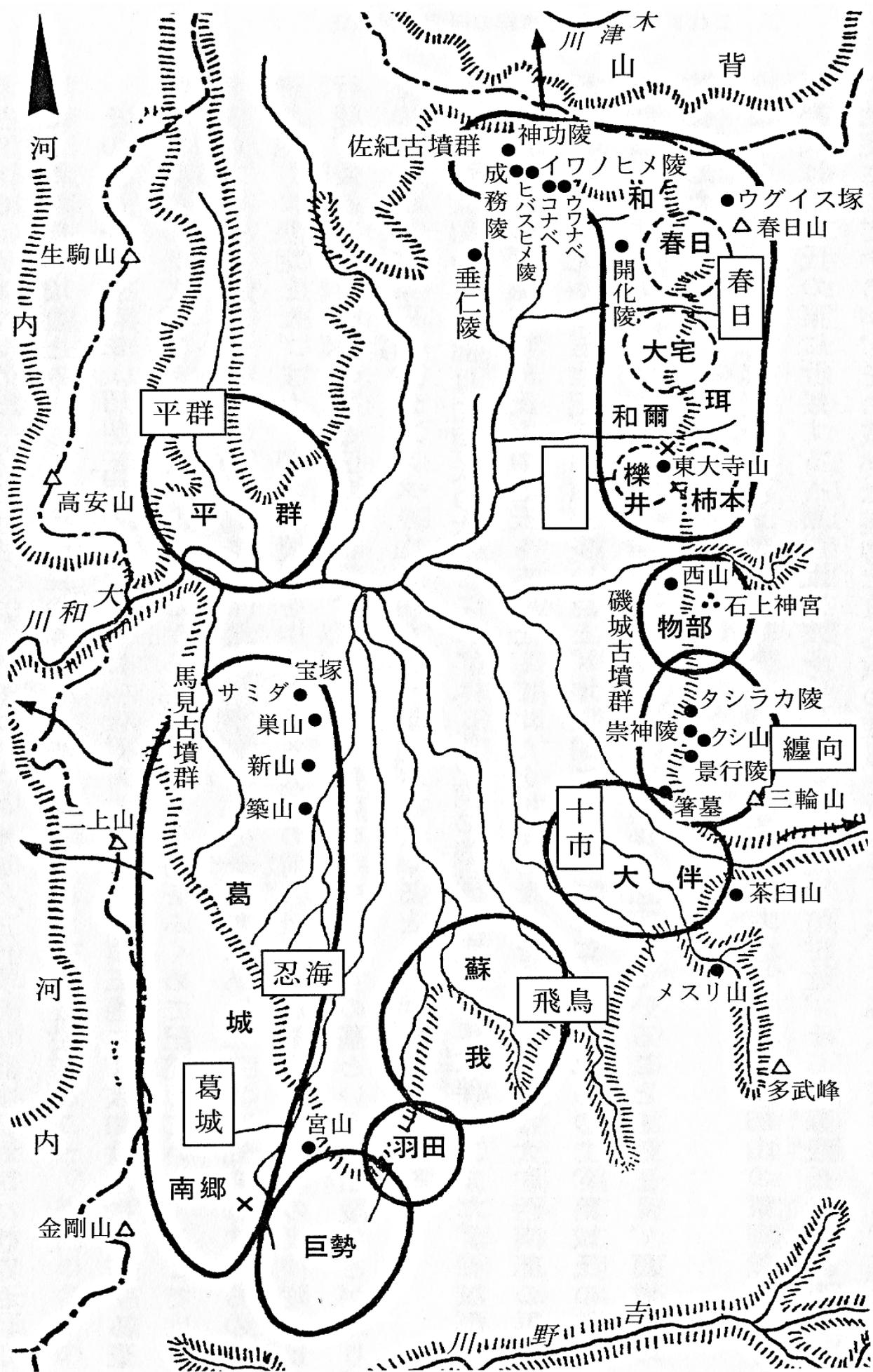


図2 大和盆地の豪族分布図 (岸 1966)



## 歴史文化クラブ 参加者名簿

和爾氏の実像；系譜と奥津城を探る

2019/11/12 (火)

番号	お名前	出欠	番号	お名前	出欠
1	内河洋文		13	羽尻嵩	
2	田中善英		14	青木芳一	
3	小田進八郎		15	中川 瑛雄	
4	松尾弘		16	古川祐司	代表
5	富江文男		17	藤田秀憲	世話人
6	永井幸次		18	塩本勝也	世話人
7	青木幸子		19	中井弘	事務局
8	平山義正		担当者： 藤田・塩本		
9	福田美伸				
10	池田 信明				
11	尾崎信次				
12	富井忠雄				